

どーもトラックがあると

参月堂主人；是記

索引代わりに 本書で扱われているDAWソフト。

チャプター 1	03
XGworks, Langomas, DigitalK, MySoundStudio, QuartzStudioFree, PowerTracks	
チャプター 2	07
N - TrackStudio, MultitrackStudio, CakeWalkHomeStudio, U - 8	
チャプター 3	10
Ardour(MixBus), EnergyXT	
チャプター 4	17
MusicMakerLE, StudioOne	
チャプター 5	22
SAWstudio, OscilaStation, FolkStudio, QY10	
あとがき	29

「週刊 My Music Studio」のバックナンバーなどがブックオフにあったのがそもそもの始まりで、取り敢えず4冊程インストールしてみた。「Singer Song Writer 8 V S」の GUI は判ったのだが、機能の縮減が激しく4回目までのアップグレードでもたいして使えない。そこで火が点いた。

1

久し振りで「Sonic Spot」などをじっくり見回した。その結果見つけたのが「XG works」の DEMO 版だった(その他にも見つけたものがある)。これが良く出来たソフトだった事は、その後の評価で知っていた。YAMAHA が満を持して発売したソフトだ。01年当時に渋谷 YAMAHA を通り掛かって、このデモを見た記憶がある。MIDI シーケンスと一緒に生音でヴォーカルが入っていたのが驚異だった。

だから DEMO でも迷う事無く、インストールして試みた。すると MIDI シーケンスを WAV 録音する事は制限無く出来た。その他の機能も試した。XG 音源の編集など YAMAHA だからこそその機能で、見事だった。鼻歌 MIDI 変換も既にあった。画面デザインもかなり好みに合って、正規版を買おうと思った。

YAHOO などで探したが、落札直後であったりタイミングが悪かった。その後の経過を見ても、いつ出品されても競る。まだ需要は多いらしい。そこで Warez を探した。ロシアの山奥に埋もれていた物を発見出来た。

改めてじっくり使ってみた。YAMAHA がその技術を結集したソフトである事は良く判る。QY の様にコードでパターンを使って自動伴奏出来る。しかし WAV のミックスだけは不備だった。ミキサーは MIDI のみで WAV はトラック画面から数値で設定しなくてはならない。エフェクトも無い。

プラグインでミキサーはあるのだが、動作しない。これは YAMAHA の PCI バス用サウンドカード(SW1000XG/P)専用のもだった。このボードを挿すとモノラル12トラックを、オンボードのエフェクトを使ってミックス出来た。とは言っても、ノートパソコンには縁の無いものだ。

そこで代替になるWAVミキサーソフトを探した。今度はSoftpediaを見回した。別なDAWでは意味が無い。条件としてはMixer画面を中心としてエフェクトが使える事。こんな条件を付けても幾つかはあるもので、発見したのは「Langomas」と「Digitalk」。

「Langomas」はGUIが立体的で見事。フェーダーとパンもある。8チャンネルの各々にWAVを読み込んで再生出来る。各Chにスタートボタンがある。しかし何処を探してもシンクロスタートのスイッチが無い。指を揃えて同時押しすれば良いのだろうが、全く現実的ではない。どうにもならないので却下。(その後、MusicMakerを使ってみると、同時再生は7トラックでも転ぶ。それを考えるとこの開発者も、同時再生は諦めたのかも知れない。)

「Digitalk」のGUIも良い。こちらは平面的デザインを極めている。こちらは使い方が特異だった。起動時にはPlaybackトラックだけに読み込み/録音が出来。このセクションにデータが入るとその収録時間だけ、他のトラック(8Ch)に録音出来る。これはどーゆー事か? どうやらPlaybackにカラオケを入れて、オーバーダブに使うのが正しいらしい。

独自エフェクトもVSTiも使えasioにも対応している。しかし重いらしい。1トラックだけの再生で転ぶ。残念だが使えない。

幾つかのダウンロードサイトで見かけ、しかし本体ホームページは既に消失しているのが「MySoundStudio」だった。やっと本体をダウンロードしてみると、結構商用的な表示になっている。せつくなのでシリアルを探し出してクラックした。

aviのトラックもあるMAソフトらしいのだが、なんとオーディオはモノで6トラック。エフェクトはデータ改変型。ミキサーの表示は美しい。使い方には全く迷わないが、実際にシンセサイザーなどを録音してみると、音は割れる。ストリングスなどビブラートが掛かる。同じ機器の上のXGworksならば大丈夫なのに。扱いは難しそうだ。

しかし何故この少トラック数なのか、更に情報を探るとなんとこれは「Digison Sound」だった。カリフォルニアの扱社は現在でも、他のソフトならば販売しているので、これはOEMだったのだろう。

「DigiOn」と言えばSSWと並び称されるべき国産MTRソフトの筈なのだが、値段の設定が高くて有名になり切れない。「Express」と付く6トラック版で¥10kもするのだ。それでも一度は試してみたいと思い、ジャストシステム版のデッドストックを探してはいた。それがこんな風に手に入ってしまった。

そうして再発見したのが「QuartzStudioFree」だった。フェーダーとパンがあって、エフェクトも使える。ちぶんで使い方を解説した(そのサイトがwebデビューだった)このソフトに、戻って来てしまった。試しに6トラックのマルチトラックデータを読み込んでみたが、十分に使える。

このソフトを遠ざけていた理由は、GUIの不一致だった。日本語フォント環境ではどうしても画面が合わなくなってしまう。正式採用するとして、今回は改めてこの画面の修正に挑んでみた。

画面表示をいぢるソフトを内外から調達した。海外のソフトでいぢると画面サイズを合わせる事が出来た。すると不思議な事に、パンとフェーダーが緑色の平面のものに代わった。ソフト側で画面サイズに合わせて調整するらしい。これはOEM版「DataBecker / MusicCenter」の名残りの様だ。

縮小画面の下にあと8ピクセル増やしたくて、日本製のソフトを使ってみた。こちらの方が美しく出来た。しかし起動毎にこの調整もしなくてはならないのが手間だ。

縮小表示で使うとして、納得の行くスキンを作ってみた。これも数年来GIMPを使い慣れて来たからこそ出来る事だった。ここで採用したのが「Digitalk」の平面的な画面デザイン。思いついてピース紺の帯を敷いて、フォントの乱れを覆ってみた。素人が時々到達出来るうまいデザインになった。

これをサイトにアップし、併せて幾つかの追加説明を加えた。このサイトはこれで完璧になったと思う。本家のサイトはNo Longerになってしまったが。

という訳で、XGworksから世界一周が始まって、何の事はない自分のサイトに戻って来てしまった。これでもう一度XGworksで遊び始められる。

ギターをいぢっていて思い着いたコード進行を、取りあえずメモ録音した。そこにタンポリンとタンポリンモドキを重ねた。するとやはりバストラとリム打ちが欲しい。

これはMIDIを鍵盤で操作して弾いた。これにオルガンを入れて夕暮れの小1時間。

その後、テレビを見乍ら、コード進行に合わせてメロディを丁稚上げた。夜分に再開して、アコースティックベースとメロディを弾いた。更に単純なコーラスを2声録音してみた。実はこれが永年、試みたかった事なのだ。

ギターソロを入れた。一発でOK。ドラムスとパーカッションをバウンス。コーラスとソロをバウンス。エフェクトはスタンドアロンの専用ソフトでトラック毎に掛けた。

これで8トラックものとなった。見知らぬボサノバ・バンドの生演奏。

XGworksは軽く再生出来てる。

一方でYAHOOを探っていて「日曜音楽」を発見してしまった。すぐに入札したのは当然の事。これもその内容は知っていた。PC9801で使えるハードだ。RS232C接続のMIDIケーブルと、ハードウェアMIDI音源が同梱されている。落札して品物が届くと、PC9821に繋いだ。お馴染みのSequenceStudioLiteでCasio音源が鳴った。

嬉しくなって、MIDIファイルを幾つもこちらに持って来てしまった。しかしPC98には久しぶりのフル稼働だったろう。本体が熱くなったのも珍しい事。あまり喜んで、使いまくってはイケナイ・アブナイと思った。

同梱のソフト「Mutone(マトン?)」は勿論Windows98でも使えた。ツールバーの下に鍵盤表示があって、ターゲットChの音が表示される。コードが推定出来て実に便利だ。MIDI機能は実に充実している。が、言語が完璧に英語だ。日本語フォルダーがバケる。絶対にOEMだと思った。そこでまたSonicSpotを見回してみた。そしてこれが「PowerTracks」だと判った。Band-In-A-Boxとも兄弟だ。良い拾い物だった。

その他SonicSpotなどで発見したのは「DigitalStudio」「ProSound」「WinJammer」「DDclip」あたり。

「winJammer」は奥ゆかしく、データ中に「demo」の文字を残すだけで全ての機能が使える、シェアウェアの鑑である。

「DigitalStudio」とか「ProSound」などとは全くベタな名称だが、これが機能

は充分だった。「ProSound」などはあまりに見事で、市販ソフトだったに違いない。これもWarezか？

「DDclip」はaviを同期出来るというMA用のソフトだった。それなら4トラックあれば充分だろう。各々ちぶんのサイトやMusicTowerに紹介を書き込んだ。

2

Warezと言えば「n - TrackStudio」のシリアルを見つけてしまったので、それに合う古いバージョンを探し出した。これもSonicSpotだ。ここはWin95時代のみまで止まっていて、直ダウンロード出来るのがすごい。他のダウンロードサイトでは、常に新しいバージョンにリンクされていてこうは行かない。

インストールしてみると、さすがにWin95時代のソフトで画面表示が素人ばい。作者はラテン系か。デフォルトのカラーが妙に派手で目にきついが、DAWとして機能は充分だ。すでにループプレイもある。

このソフトは当初、MTRとしてスタートしたという。最初は4chだったというから、地道に改良を重ねたものだ。オーディオとmidiを同じ扱いで並べた発想は、他の市販ソフトよりも早かったとゆー。ミキサーstripp画面だけは極めて素人ばいが、95当時のWarezだから文句言う筋合いもないか。しかし、マスターヴォリュームだけフェーダーでなく丸いつまみなのは何故なんだろう。

録音トラックの選択やフォーマットの設定は、録音用VUMETER下のスイッチです。「Monitor」スイッチは音ではなく、入力レベルの表示。入力音のモニターは時間軸インジケーターの脇の「LIVE」スイッチから(レイテンシはある)。録音時にはMixerは関係ない。

録音したトラックが不本意な場合、右クリックメニューから削除を選べるがこの場合、HDDからの削除も同時に行う。残したい場合は、スイッチをちゃんと選ぶこと。

唯一残念だったのはオーディオ読み込み画面で、日本語表示が一部重なってしまう。すいません私達が2バイト文字圏なのがいけないのです。

古参であり乍ら、未だ開発が続いてるソフトに「Multitrack Studio」がある。ひと昔前は、全てが1画面な処が使い難いと敬遠していたのだが、なんと昨今は「Bitwig Studio」や「Studio One」などが、敢えてこの表示を採用している。周回遅れでトップになってしまった様だ。

起動してみると、精緻な画面に感心する。これわ確かに、独自の開発を続けて来ただけの事のあるソフトウェアだ。

インストールではレジストリなどいぢっていない。解凍するだけに等しい。INIの為にApplicationDataにフォルダを作る。

Multitrack Studio Liteは3トラック限定となっているが、MIDIは1トラックに全てが入る。ここに更にステレオ2トラックのオーディオが録音出来る。これはやはりマルチトラックとしての用途よりMIDIをWav録音する用途にこそ向いている。再生音をオーディオトラックに録音して他で使うのが良いだろう。その再生にはエフェクトも使える事だし。

ファイルへのトラックダウンはオーディオ2トラック分だけ。その補助の為かMonoのwavを左右にくっつけてStereoの1ファイルにするToolがある。これを使用して、4テイク録ったMonoを各々をステレオ仕様の2ファイルにして新たに読み込ませるとか。

波形エディターの中では複数トラックを並べて表示できる。これは上下左右とも拡大縮小表示出来、再生に追従してインジケータも動く。しかし元トラックの波形が開いてなければならない。元波形を閉じてフェーダー操作できれば良いのに。フルバージョンならばここでエンベロープを描ける。そーゆーワークフローならば、その後は波形を閉じてても良いのだからーが。

ともかくマルチトラックと名乗る程には各トラックを波形で表示する発想に欠ける。各トラックはラック部分と波形(ピアノロール)と2段で表示せざるを得ず、これでは1画面で3段も表示できない。かと言って波形をナロウにする仕掛けもない。その辺りが改良されてたら、フルバージョンを買ったかも。

久しぶりで秋葉原のジャンクストリートを歩いた。もう末広町へ出るとゆー辺りの店で珍しくも音楽ソフトを見つけた。ここは中古ソフトなどあまり置いてはいない店なのだが、ここ数年、サウンドボード関連の出物はあった。しかし音楽ソフトの中古など、なかなか出るものではない。一目見た時にはこれがDAWソフトだとわ気付かなかった。オフィスソフトなのかと思った。それ程に地味なパッケージなのだ。

しかし名前が記憶にあった、「HomeStudio」。これはCakeWalk系のソフトのLE版だった筈だ、と。2100円だ、迷わず買った。パッケージが地味だったのは、これがまだEDIROLブランドの物だったからだ。それ程に時代がついているが、未開封だ。

持ち帰ってから情報収集を始めた。CakeWalkとは古典的なシーケンサーだったが、今まで視野に入って来た事が無かった。いわゆる4大ソフトにも名を挙げられず、存在自体が地味だった。しかしこれもDAWへと進化を遂げて現代では「Sonar」となっていた。オーディオ的には、ACIDライクな機能を深化していた。

記憶に残っていたのはこれがasio陣営に属さず、独自にカーネルストリーミングの技術を開発していると知ったからだった。当家のPCはいずれも富士通なので、全てがSigmaTelのドライバーなのだ。これがasioとは相性が悪い。依ってかなりのスペックの機種でもasioが活用できないのだ。

「Sonar」系の解説書では、サウンドドライバをWDMにせよ(asioより推奨)と書いている。まさにそれこそがこのソフトを使う理由なのだ。

偶々、解説書は当家にあった。何でだろう。CubaseLEを落札した時に、おまけに付けて呉れたのだったか。この解説書を熟読した。機能としては過不足無い。しかし画面表示がイマひとつなのだ。

トラックごとの設定詳細を、トラック名のスペースで表示するのはCubaseと同じなのだが、この表示があまりにこなれていない。色とりどりの文字は何とかならんか。音量表示のバーも美しくない。

ここにパンもゲインもあるので、ミキサー画面が無いのかと心配したが、これは存在した。しかしトランスポートがツールバーに入ってるのだ。これは不便ではないか。画面のカスタマイズで場所を代えられるらしいが。

色々同時代のソフトを調べて見ると、この頃にはまだ他社も、トランスポートを独立させてはいなかった。そんな意味でも「XGworks」や「Cubase」は早かったと言える。

本ソフトはRolandの製品なので、U - 8との置換えは可能なのだが、その選択肢は無い。さてこのソフトを使おうか、どーしよーか。まだ決めかねて未開封のままである。

U - 8の難点はただ一つ、データフォルダの位置を自由に決められない事だった。レジストリまで見てみたが、やはりデータフォルダを決定するエントリは無い。こーしてさんざん探し廻った時には見つけられなかったのに、他の機会にあっさり見つけた。Windows 直下に U8.ini とゆー設定ファイルがあったのだ。

一方で、レジストリを見ていてASIOとゆーエントリを見つけてしまった。なるほど、U - 8はドライバが直接、フィジカルコントローラと遣り取りしていたのか。だから低スペックPCでこのMTR作業が出来た訳だ。

結局はこれでかなりの作業をしている。LPのデジタルイズなど殆どこれだった。そこでフェイルセーフ機も抑えておこうとは思っていた。その後、ソフマップでまたこのU - 8を見つけた。¥3K代だったので、どーしよーかと思っていたが1カ月経つと¥1980になっていた。それも更に10%引きとなっている。それなら、と買った。店出しのビニール包装のまま、倉庫に蔵った。

3

「Ardour」とゆーMTRソフトには大いに関心があり、試用記事などを検索してその機能を調べていた。しかしこれはLinuxベースのソフトであり、MacOSにしは移植されていない。

MacOSは「X」からUnixベースのオープンソースで作られているそうだ。だが

らLinuxのソフトは移植しやすいのだろう。実際、Mac OS XのデスクトップはX - WindowsとゆーLinuxのデスクトップなのだという(そもそもLinuxは、Windows 3.1とMS - DOSの様に、コマンドラインベースのOSに対してGuiを被せているものらしい)。

Linuxものとしては「Audacity」にしる「Traverso」にしる「Jokosher」にしる、クロスプラットフォームなのは普通。いずれWindowsにも移植されて当然かと思って待っていた。調べてみると移植されたものは「MixBus」とゆー名称のものだけで、150ドルの市販ソフトとなっていた。しかもかなりの機能は「Comming Soon」。これでは待ってもWin版は出ないな(と思ったら、作者自身が作り始めている。夜なべ版と名乗ってカンパ求めている)。「Orion」とゆーソフトなどはこれをWin化したか、とも疑えるけど。

そこでLinux本体導入の可能性から考えてみた。使えそうなハードなら簡単に買えるだろうから。Ubuntuとゆー陣営にはマルチメディアのソフト使用に特化した版(ディストリビュートというらしい)があった。ここには多くのDAWと共にArdourも収録されている。インストールするならこれが良いだろう。しかしこのインストールディスクはDVDで配布されている。DVDドライブ付のハードを探した。OS無しのもを選んでフルインストールしてみた。

そんな訳で使ってみたかったArdourを、正式に起動した。

Ardourは基本的には寄付ソフトだ。本家ホームページではダウンロードの過程で寄付金の入金を求められる。金額は自由なのだが1ドルでも入れなければプラグインが使えないらしい。これは作者の時給なのだという。寄付された金額に応じて開発に時間を割くそうだ。

Ardourの制作者はLinux用のオーディオマッパーを作成している人で、Ardourもその実際の使用の為に作られているのだろう。このJackこそがasioに比すべき低レイテンシーを実現するシステムなのだ。それを試したくてここまで来た様なものだ。

Jackは、Ardour起動時に自動的に呼び込まれる。SessionControlのAudio SetupタブはUbuntu起動直後だけに現れる。項目は基本的にQjackctlのSetupと同じもの。ここで設定をする。

ソフトウェア デバイス間の接続設定は、起動しているソフトに合わせて自動で行われるらしい。おまけにゾンビのお祓いもして呉れるらしい。これは停止しても勝手に再起動する Pulseaudio の事を言うらしい。

Ardourを起動すると、最初にプロジェクトフォルダーの設定を求められる。これを決めれば、後はトラック画面が開く。

最初はマスターバスのみが表示されている。ここにトラックを追加して使う。この辺りは「Podium」に似ている。トラックには「Tape」「Loop」のモードがある。Tapeとは録音を延々続けられるもので、Loopは小節単位で短く取り込むものらしい。録音やエディットをする度に、オーディオプールにデータが増えて行く点は「ProTools」にアーキテクトに近い。アレンジ画面とミキサー画面がある。これは後述する「EnergyXT」にも近い。

Importはデータを読む毎にトラックが配置される状態と、最初に必要トラック数を並べてから読み込む方法がある。前者の場合はトラックネームがファイル名になる。「コピーを作る」のチェックは外しておかないと、起動ごとにプールに同じファイルを入れてしまう。

USBメモリとゆー物は、慣習的にFAT32でフォーマットされている。これにMac OSやLinuxの側から対応しているので、Windowsからのデータの持ち込みには悩む必要はない。

次第に判った事；

最初のプロジェクトの設定でステレオになっている場合ここでトラックにモノを入れようすると壊れる。一度Removeして再度遣り直しすれば、学習する。

録音はトラックの赤丸を押してマイクを活かす。

Option - Monitoringから「Ardour does monitoring」をチェック。これで入力音がモニター出来る。モニターを活かして、レベルを調整。

トランスポートの赤丸で録音準備。録音開始(スペースが の代わりなので、うっかり触らない様に)。しかしスカイプマイクで録音するのではこのシステム

の意味がない。やはりUSB機器で録音だろう。

USB Audio Interfaceの使用についてはかなりの設定が必要になるので、この文末に別に書く。

全長のトラックを入れたら、MarkerのENDを末尾に置いておく。

Viewから拡大縮小を選べるが、このボタンは画面下部にもある。

Option - MiscOptionから「Stop Transport At Session End」にチェック。Transportで「Auto Return」にチェックを入れると演奏の終わりで停まり、冒頭に戻る(画面上部にボタンあり)。

ボリュームの自動化にはエンベロープとオートメーションがある。

先づ「骨と関節(これはかなり一般的)」のアイコンをONにする。

エンベロープの場合はこれでヴォリューム0.0のラインが現れるので、ここを打ってそこから折ってゆく。

オートメーションの場合は「a(アーム)」ボタンを押して、トラック毎に付随するもう一つのトラックを表示する。

ミキサー画面を表示し、フェーダー下の「m(マニュアル)」を「Write」にして演奏を開始。曲中でフェーダーを動かすとそれが記録される。演奏を停止しすぐにボタンを「Play」に変える。

トラック画面の付随トラック中のエンベロープ線を編集する。余分なものはShift + 右クリックで消せる。これにより演奏中にフェーダーが自動でレベル位置へ動く。

次第に判った事；

レベル決めは最初にシンセなどのオケの塊を0.0にして周辺のトラックのレベルを決める。これを流して再生しマスタートラックのレッドゾーンのレベル最大値を採る。この最大値にマイナスを付けて、マスタートラックのピークにする。

肝心の音質は、確かにWindows世界とは違う。Rhodesの高次倍音が出ている。このソフト自体は民生用程度の仕様だが、音質を重視してこれでDAWす

る選択もあるだろう。しかし搭載エフェクトは貧弱。

掛けるとせっかくの音が瘦せてしまう。対応として同じwavを隣にもコピーし、こちらをエフェクトで改変、原音と並べてミックスするのが正解かな。

各トラック毎にエフェクトを設定すると、かなり重くなる。重さはマウスの動きを抑制する。どーも外部の小アプリを読み込んでいる挙動に見える。重いのもエフェクト自体の仕様なのだろう。

Save Asを選ぶとSnapShotの保存画面になる。

この場合は各種設定だけを別なパラメータで保存する。「別名で保存」は無いとゆー設計思想になっている。

デフォルトでは画面の文字表示がかなり大きい。PreferenceのMiscでフォントサイズの変更が出来る。

トランスポートを押すとミキサー画面が背面になるのだけはどーにも不便。ミキサーの背丈を下げてトランスポートが見える様にしたり・Ubuntu特有の複数画面を使って隣に押し出してみたりとあれこれ試行。

Exportを終えると「成功おめでとう。そこでドネーションは如何」と誘いがある。不便さえなければ、同意したいのだけだね。

ともかく良い音でミックスダウン出来たとは思うのだが、さてそこで、このファイルを他の環境で再生しても、同じ音はするのだろうか。

USB Audio Interface使用の生録音

JackはArdourに内包されて起動してる。最初の起動時はAudioSetUpタブが表示される。Qjackctl単体立上げ時の設定は無関係。

Deviceのタブ; Driverは「ALSA」

Interfaceは「ALC262Analog」(機種ごとに固有)

Advancedのタブ; InputDeviceは「USB Audio」

OutputDeviceは「ALC262Analog」

基本的概念は、Ubuntuに対する音響処理インターフェイスがAlsaで、その

対応デバイスがUSBcodec。尚、Pulseaudioは停止せよと公式HPにアドバイスがある。

Ardourは現在バージョン2だが、3がベータで公開されているという。そちらにはMIDIシーケンス機能もあり、このバージョンからは本格的に統合型DAWソフトとなるのだろう。

何と発音するのかについては「Ardour」だろうとゆー鋭い指摘がある。英単語としては「情熱」の意味で「あ～だ」と発音するのだが、これはむしろロマン語圏の人に「HardWare」を発音させたと見るのはどーだろーか。

「EnergyXT」はベリンガーのデジタルミキサーのバンドルソフトである。但しCD-ROMなどで供給はされず、マニュアルにダウンロードの案内がある。ソフト本体は全て同じもので、キイによって機能の制限が変わるものらしい。数年前に入手してインストールもしてあったのだが、どうも使い勝手が悪く、試す事もせずに来た。それを今回、じっくりいぢってみた。

とゆーのもこれまでシェアで来たこのソフトにもフリー版が登場したのだ。これは「Core」バージョンと名付けられている。

本ソフトの画面表示はアレンジ画面・ミキサー画面・モジュール画面の3つを切り替える。どうも先の「Ardour」に近い印象がある。あるいはこれも内部構造を借りているのか。

このバージョンで立ち上げた場合の制限は、トラックが6まで。この数の中でオーディオとmidiを案分する事になる。newで立ち上げるとこのオーディオとmidiを1トラックづつ用意した状態になる。勿論、簡単に削除も追加も出来る。

追加は、アレンジ画面のリスト部分で右クリックし、オーディオかインストゥルメントを選ぶ。このリスト部分をダブルクリックすると録音可能な状態になる。この時に、リスト部分上部のループボタンを解除してストレート状態にしておく必要がある。後はツールバーのトランスポートから録音ボタンを押すだけで良い。

録音データは、プログラムフォルダ中にプロジェクトフォルダが生成され、そこに収まる。これをd:などに設定する事は出来ない。EnergyXTはポータブルソフトという売りなので、プログラムフォルダ自体をd:に置く方が良いのかも知れない。

録音後のデータは、zoom(左右の)で画面サイズを縮小表示できる。オーディオデータ上にエンベロープを描く用法は、このバージョンでは制限されている。つまり、EnergyXTでは、ミキサーでのバランスしか出来ないという事になる。

注意点;

このオーディオデータをダブルクリックすると、wavのエディット画面になる。しかしこれはアシサイズ用のエディットしか出来ない。

ブラウザーからフォルダを辿って任意のwavを掴み、ドラッグでトラックに落とす事も出来るが、バグがありそうだ。

「EnergyXT」はこれ自体が「Massiva」の音源として開発された。後にDAW化し、母艦からスタンドアロン化した。依ってアーキテクトとしては、外部midi音源のプラグイン使用の方が、例外的な扱いになる。

midiはインストゥルメントトラックで打ち込む。リスト部分を右クリックしてアウトプットを決める。トラックをダブルクリックするとピアノロールが一部見える。シーケンス部をクリックして空のシーケンスを出す。

そのデータ名部分をダブルクリックすると、ピアノロール画面が広がる。グリッド内をダブルクリックするとノートが書き込まれる。ヴェロシティやプログラムチェンジは、鍵盤下の+を押し選択する。これによって、ピアノロール下のバーグラフ部分を切り替えて調整出来る様になる。

しかしプログラムチェンジのバーグラフとは意味不明。確かに0~127の数値を取るのだが、それを表示する手段が無い。音色を勘で決めるしかない。このプログラムチェンジのバーの伸張は、時に感知されない。選択状態にして左右で動かすと効く位置がある。

小シーケンスは「Massiva」同様にコントロール押しクリックで、コピー & 移動出来る。

注意点；

smfを読み込むと各トラック別に表示される。しかしテンポもチャンネルもプログラムチェンジも無視されている。

テンポの数値によっては、妙な転び方をする。バグかも知れない。

結論；ともかくまだバグがある。Massivaからの発展の割には、完成度が低い。独自音源を使用すると重い。基本的には1GHz以上のスペックを要する。

MIDIシーケンサー部分はMassivaなので、MTR部分を新たな評価の対象とすべきだろう。オーディオの扱いは、ACIDライクな使用方法としては過不足無い。録音の手順も簡単だ。本ソフトはポータブルな処を活かした、MTRに限定した使用方法が良いだろう。

世の中には「Sampleplitude 10 se」のフリー版があると聞く。画面を見るとこれもArdourの様に気真面目なデザイン。MusicMakerと違ってFirebirdデータベースを使用しない分、軽いという。MIDI機能は同程度だとかで「おまけ程度」との評価が多い。MIDIシーケンサーとはそれ自体、プログラミングとして負担の多い仕事なのだろうか。

4

永年使って来たバンドのチューナーの、ACアダプターがついに断線しかけた。近隣のリサイクルショップで見てきたが、センターマイナスなのが特殊でなかなか見つからない。コネクタの半田付を換えれば良いのだが、出来れば出来合いの物が欲しかった。こんな物は秋葉原に行けば簡単に見つかると思っていたが、なかなか時間が出来なかった。

入稿の日に、ようやくその時間が出来て、秋葉原に回った。物は簡単に見つかった。その帰り、SDカードなどのメモリを扱っている店がどーも気になって、わざわざZ字に路を辿って寄ってみた。その店頭のSDカードを積んだカートに、な

んと「MusicMakerLE」の箱が置いてあった。何故ここに。

シュリンクもそのままの未開封品、3980円。即買った。「MusicMaker」はまだ日本発売される前のバージョン12「Basic」をインストールしてみた事があった。そのGUIの良さに関心したものだ。asio代わりの独自カーネルドライバーも付いていた。しかしMIDIデータに関しては全ての機能を削除してあって、様子も判らなかつた。Vaioは不具の子でマザーボードは2回交換した。なので、幾度かリカバリして、その折に消えていた。

しかし気になるソフトだったので、その後の様子は見ていた。やがて日本のメーカーによってローカライズされ発売された。しかしそれは萌系のキャラをつけ加えて「ミク」人気に便乗した商品へと発展してしまった。そのメーカーのローカライズした「LE」版だった。「Basic」の印象が良かったのでさっそくFMVにインストールしてみた。

「LE」はMIDI機能を潔く全てカットしたものだ。オーディオ機能は全てあり、それは見事なMTRソフトだった。意外だったのは動画編集もかなり凝っているとゆー事だった。トラックは動画データも同様に扱える。つまりマルチトラックで、重ね合わせる事も出来るのだ。そちらのエフェクトも充実している。その上、CD焼き機能も持っている。

十分な機能なのだが、肝心のGUIのうちミキサー画面の色が気に入らない。なんでこんな玩具っぽくしてしまったのだろう。そこで思い着いてVaioにまた「Basic」をインストールしてみた。そこからミキサー画面のbmpファイルを貰った。更にアドインのシンセを貰った。デモソングも持って来てみたが、容量がデカイわりに禄な曲でもない。と、まあ勝手なカスタマイズ。

MIDI機能は失われていたが「Basic」もMTRとしてならば文句の無いソフトだった。今では「18」までバージョンが進んだが、フリーにしたのはこの「12」だけだ。やはり後発商品として宣伝の為にこーゆーフリー版が有用だったのだろうと思う。特に未発売だった日本に於いて。改めて機能をチェックし、「MusicTower」の掲示板の試用記事に手を入れた。

「MusicMaker」が気に入ってちょっと検索していたら、日本人のブログでバージョン16の本社ダウンロードURLを掲示してる人がいた。ここから16のフルバージョンがダウンロード出来てしまった。これも餌食にしようと、Vaioの「Basic」をちょっと脇に措いて、ここに更にインストールしてみた。これからまたミキサー画面とシンセとデモデータを取った。で、この「16」をアンインストールしようとしてうっかり「Basic」のレジストリも消してしまった。仕方無く両方を消した。

「MAGIX」は「メディアプール」とゆーエクスプローラ機能の為に「Firebird」とゆーデータベースソフトを同時にインストールしている。「MusicMaker」本体のアンインストールでは、こちらを消さない。しかもこのデータベースソフトは常時起動していて、アンインストール出来ないのだ。その事を知るまでに時間を要した。

そんな事を検索していてまた本社サイトのバージョン14のURLを見つけた。これもダウンロードした。再び三度Vaioにインストールした。「14」は「12」の次のバージョンだが、縁起を担いで「13」の数字をスキップしている。

フルバージョンは試用7日間なのだが、アクティベーションで30日間まで延長出来る。メーカーは信用出来るので本社にレジストして、このアクティベーションコードを入手した。おまけで本社のサイトで500メガまでのオンラインストレージ権と10ユーロのクーポンも貰えた。どーでもいーけど。

「14」のGUIは「12」に近い。ミキサー画面などは全く同じだった。シンセは一つだけ。デモ曲は3曲だが、ひとつは「LE」と同じだった。まあたいした曲ではないが。

これでやっとMIDI機能を見る事ができた。インポートしたMIDIは1トラックに全て入ってしまう。トラックをクリックするとピアノロールが表示される。全音域の全トラックが全画面「オニオンスライス表示」になっている(これはSampleも同じらしい)。MIDIデータをトラックごとに分割する「達郎方式」が必要で、その為に有志によるフリーソフトがある。

読み込み時に本体設定のテンポを取るか・MIDIデータ内のテンポを取るかを選択出来る。本体設定のテンポで操作し、アドインの音源で鳴らすのが、通常の使い方なのだろうな。

先進技術としては、一つのトラックでオーディオサンプルとMIDIデータを連続

して並べられる。これは日本人のシェアウェア「Musique」にしか無かった機能だ。

試しに「達郎方式」データを作ってSMFをトラック毎に入れてみた。不思議な事にテンポが違う。テンポの数字は本体・データ内とも同じなので分解能が違ったとゆー事か。仕方なく耳で調整し、元のテンポと合わせた。その各トラックを、各々WAV録音してみた。これはかなりスムーズに出来た。

けれどこのオーディオデータには、何かの時間設定が付随している。つまりアシダイズされているとゆー事か。MIDIのテンポ120で生成したデータが119.98とかの数値になっている。無理矢理合わせた結果か。

このデータ群を基に、多重録音を連ねてみた。この録音データはHDPとゆー拡張子の独自形式らしい。テイクは本体設定のテンポラリフォルダに、1001とか適当な数字付名で残されて行く。

プロジェクトファイルを保存しない場合には、本体終了と同時にこのテンポラリファイルも消える。このテイクを明示的に残したい場合には、ファイルをコピーしておく必要がある。起動しなおして、基のトラックに改めてこれを貼り直す。何か手順を誤ってますか。

このソフトの敷居の低さのひとつは、作業の最初にプロジェクトフォルダを作る必要が無いことなのだが、結果としてテンポラリフォルダ内にあらゆるオーディオデータが溜まってしまう。これはやはり作業開始時に専用フォルダを作り、設定画面からそのフォルダをテンポラリフォルダに指定してやった方が良いみたい。まるで手作業ですが。

オーディオ再生はステレオ7トラックで、時々転ぶ。バッファの数値を倍にしてみたり、オーディオコマンダーを停止したりしたが、好転しない。スカイプマイクで生録音する分にはレイテンシは少ない。しかし多重録音時にも再生は頻繁に転ぶ、どころか再生トラックは停止したまま録音だけになったり。転んでばかりいては、生演奏は合わせられない。やはりコンセプトは、サンプルのモザイク敷詰め、全長1テイクで録るとゆー発想のソフトではないのだな。この辺りがスペック

の限界らしい。

最も気になっていたヴォリュームエンベロープは、付属するPDFマニュアルの表記が間違っていた。マニュアルではいかにもクレヨンで描いた様なカーブになっていた。しかし実際にはそれは小さな が無数に重なっている状態だった。センターラインを「パス描き矢印」で注意深くクリックして、この をひとつづつ出さなければならない。しかも を出したら、これは「矢印カーソル」に持ち換えて移動させなければならない。これがかなり難しい。つい沢山の が出てクレヨン化している。

このエンベロープを丁寧に描き込む程に、読み込み時に待たされる。このトラックは名称表示にVolumeと書かれる。あるいはヴォリューム調節したテンポラリーファイルを生成して、それをトラックに置いているのか。

結局の処、エンベロープもエフェクトSENDもパンも、画面上の手加減でしかない。数値で表現出来るのはフェーダーのヴォリュームだけだ。しかしエンベロープを描くと、フェーダーは無視される。上記のアシサイズと共に、WAVを他のソフトに持って行くのには、都合が悪い。

DAWで多重録音をし慣れて来ると、各々のトラックのwavデータはひとつづつきちんと無音化やフェードやノーマライズをして整えておく様になった。すると外部の編集ソフトに連携しているソフトの方が便利だとゆー事になる。Mix Craftなどでは、連携可能なwavエディターを添えて使っている。その点でもMusic Makerは、不満がある。

Smplitude直系だとゆーのにこれは、wavエディターを持たない。結局は録ったままのデータをトラックに置いて、ヴォリュームエンベロープで調整するしかない。そこがどーにも喰い足りない。

などとあれこれ本格的な使い方を試みていると、拡大縮小で画面表示が異常になったりするのとは常態。上書き保存を繰り返していたら、ボリュームエンベロープのデータが異常になった。

まだバグがある。毎年バージョンを上げるソフトだが、それはクラックを避ける

為だと思っていた。しかし実際には改良を継続しているとゆー事なのだ。

そんな処までチェックして、深夜にまた起動しようとしたらもう期限が切れてしまった。nagを閉じるとソフトも終わる。iniファイルをいぢって何処かのテーブルを壊したらしい。日限を過ぎるとフラグが立つのだな。どーにか復帰させよーと更にいぢったが、どーにもならず仕方無くアンインストールした。もう慣れたものである。

正式に発行された30日間のコードも、本体インストールから日時を措くと使えなくなるそーだ。どーも本社発行のアクティベーションコードには日付も入っているらしい。だからアングラサイトで晒されているシリアルは使えなくなるのだ。これらを使う為には、コードが発行された年次に時計をワープさせる必要があるそーだ。

しかしどーして「MusicMaker」は継続使用できない運命なのか。

Vaioをロールバック。

などごちゃごちゃやっているうちに、何と「Studio One」のフリー版が公開された。確かにクリスタルの開発者は次期ソフトもフリー版を用意するとは書いていた。しかし「Studio One」が発表されてみるとあまりに高機能なので、これはフリー版は無いだろーと思っていた。しかし開発者は約束を守って呉れたのね。善い行いをしていると良いごほうびがあるのね。

5

取りあえずこのオフ期は、PCベースの多重録音を中心にするぞ、と思い準備にPayPalのアカウントを取得した。まゝ100ドルとか100ユーロ程度で何か、良く出来たソフトを、と思って随分探した。今まではスルーしていたSharewareに目を向けた訳だが、視点が代わればまた幾つか見つかるもので。

しかしそーいったダウンロードサイトには必ず「n-Track Studio」がある。この熱心な宣伝ぶりには感心してしまう。サイトが選んで載せているものとしては「Reaper」が目立つ。こちらはむしろ、ソフトの印象が良いのだろうな。新参のソ

フトでは「Metro」とゆーのもスジが良さそうだ。

予算を遥かに越えた250ドルとか300ドルのソフトならば、上記の「MixBus」とか「OrionPro」とかもある。「SAWpro」は更に一桁高い。これなど最古参ゆえに、昔の気位が残っているのだろうな。しかし大方のSharewareは、剩り開発の程度が高くない。これならばフリーの方がかなりマシなのがある。

SAWstudio操作法

起動したら先づ天井メニューのOptionから、AudioHardwareSetUpをする。

天井メニューのFileからOpenSoundFileAndCreateRegionでwavを選択するとFullView・SoundView・RegionViewに波形が展開。

RegionViewの「ADDtoMT」ボタンで波形がMultitrackViewに入り・SequenceViewにも入る。

MultitrackViewで「波」のボタンを押すと波形表示。ZMINで拡大表示、ZMOUTで縮小表示。「数字」を掴むと、トラックごとの入れ替えが出来る。

フェーダーアイコンを押すと1トラックだけのフェーダーが出る。演奏中に操作するとそのままエンベロープが書き込まれる。Playするとその通りにフェーダーが動く(MultitrackViewのウインドウをアクティブにする事)。

範囲の開始点設定はCtrl+Bをクリック。すると波形の色が変わる。画面下の定規のクリックでマーキング。「B」ボタンが活きる。

範囲の終了点設定はCtrl+Eをクリック。すると波形の色が変わる。画面下の定規のクリックでマーキング。「E」ボタンが活きる。

こーやって世界を深く探っていると廃盤ソフトにも行き当たる。「Oscillation」などは、独自の深化を遂げた末に、開発チームが喧嘩別れしてしまったのだろう。

これは実に奇妙な名前のDAWだ。しかしこのソフト、当初はDeltaSPというも

っと可笑しな名前だった。当然DSP(デジタル・サウンド・プロセッシング)の駄洒落ですね。DeltaSPは複数のVSTインストゥルメントとVSTエフェクトから成り、その基幹としてMIDIシーケンサーとAudioレコーダーを加えたパッケージだった。

そこから発展したのが本ソフトOscilla Stationとなる。こちらはMIDIシーケンサーとAudioレコーダーを一体化してDAWソフトに組み上げた。しかし本ソフト、開発元のRocktave(ロック・オクターブですね)が解散してしまったので、ここで開発は停止した。

開発チームはその後再び分化し、MIDIシーケンサー部分のソースコードだけが何故かオープンソース化された。こちらはMacaw(マカオ;賭博場のイメージかな)という名で、開発が続けられている。

一連の名称が奇妙なセンスである様に、画面表示にも独特のセンスが継承されている。一時代前の流行の様に立体感は付けず、基本的には寒色で統一。インジケータなどには輪郭線を付けない。

起動時にはMIDIのインプットを確認するので、本ソフトより先にMIDI機器の接続をしておく。MIDIの使用をしない場合は、ここから入る設定画面で「Inputを確認しない」をチェック。

とまあアレンジ画面までは行き着いたが、wavやMIDIをインポートしようとして、プール画面から抜け出せない。難し過ぎる。

などとPC内でデータを移動させていたら、VSTエフェクトを集めたフォルダーを見つけた。一体何処からダウンロードしたのだったか。もはや何の手掛りもない。調べてみると、このエフェクト群は作者ページもNo Longerになっているのだが、何故かMixcraftにまだ同梱されているのだという。そーいえばver.1をインストールしたことがある。その後、これはWavosaurで使った様な記憶がある。そのままDAW用のPCへ移し、各々のソフトからリンクさせておいた。

「Folk Studio」はOnyxとか JasmineMusicTech とか名乗る開発者のDAW。ベータのままNo Longer。あえてインストールしてみたら、ベータの割にかなり作り込まれていて驚いた。これも色彩に透明感がないのが特徴か。

アーキテクトとしては、あらゆるエンベロープをトラックにレイヤー表記するとゆーものだった。それゆえ最も重いソフトである。プチノイズが出易い。

これを飼い馴らすのにはちょっと頭を使った。Windowsのレジストリで、L2キャッシュの値を直接設定するという方法が一番効いた。これをデフォルトの0のままにしておく、仮想メモリを優先して使う為、HDDのアクセス動作がもろに影響する。

起動時にCランタイム(Vcpvcr71.dll)が無いと言われ困惑したが、それさえ調達できれば問題なく起動出来た。起動時に毎回サンプルレートだけ設定。各トラックの青いラッパのアイコンはデフォルトで点灯するので、作業の始めには先づこれを消すこと。WindowsのRAMもクリアしておくとうまいかな。

けれど起動時にVSTをチェックするらしく、相性の悪いのが居ると起動自体が出来なくなってしまう気分屋さん。その場合は対象VSTフォルダーを一時、別名化する。すると起動できるので、VSTフォルダーの指定を削除。

まあVSTはシステムも巻き込み易いのでそんなもん。エフェクトは選択トラック毎に、左ペインが切り替わって表示。ここに右クリックで追加出来る。複数重ねてラック化が当然らしい。これが右ペインと連動、各パラメータを表示する。

エフェクト戻りの On/Off はひと纏めにして天井のアイコン。各トラックのボタンでバイパスも可能。

エンベロープを描くには2段階の手順。右ペイン AudioControllers で をクリックし 表記に代えると、上段 Enabled に表示される。目アイコンでトラックに表示。ペンアイコンで書き込む・消しゴムアイコンで消す。カーブ型をいろいろ選べるのが特徴的。この段を Delete するとトラックのエンベロープも消去される。

同様に下段のVSTエフェクトも、全ての設定をエンベロープ化出来る仕様らしく。とわ言え、設定は各社違うだろーから、そこに無理があったらしい。

Input はマルチ設定できるが、Output はステレオ1系統。基本はオンボードのサウンドドライバ送り。しかし本ソフトにはバッファ値設定などが無い。

ASIOが断片化してぶつぶつプチノイズになる。この場合は、一度他のASIOに切り替え、OKしてすぐに戻す。ASIO DirectX FullDuplex Driverは相性出ると自社ヘルプにもある。安定しないのは、DirectX側の仕様らしい。

各トラック左欄のスピーカーアイコンはモニター。切れば負荷はかなり軽くなる。その左の時計アイコンはトラックのレイテンシー調整。

モノラルのWavはMONOトラックを作って置く方が負荷は軽い。トラックにBUSを作ってOutput欄から送れるのだが、原音から2分岐ではない。これわエフェクト用途ではなく複数トラックを纏める為らしい。

エフェクト掛けたいトラックは同じWavを2本立ち上げ、一方をBUS送りにするしかない。これなら送りレベルを自由に調整出来る。

Masterトラックの表示や、Controlトラック非表示は最上段定規横のボタンから。この辺りいぢってるとフリーズ。同梱デモ曲も落ちる。ここいらにバグ在りか。

下段ペインにはMixerもちゃんとあるが、並びは固定。オートメーションは利かない。青アイコンはLRを切り離す。Mixerをフローティング出来ないのは残念、空欄が無駄。この辺りの造りからして作者Arexはこの後Reaperに移籍したか。

保存すると各パーツをフォルダーに納め、その外にプロジェクトファイルを置く。Templateフォルダーをコピー/リネームしてその中から始めた方が良いかも。外から持ち込んだWavは全て配下のAudioフォルダーにコピーされる。

レンダリングは内部処理で結構早い。

そんな訳で「買う」意思はあるのに、買うに値するソフトが見つからず、相変わらずフリー化されたWarezにばかり行き当たっている。

QY10の音が小さくなったかなと思ったのは去年辺り。コンテナボックスは地震で落ちて蓋が割れた。しかしその犠牲のおかげで、中身は無事だと思っていた。少々ドラムの音が聞こえ難いとは思ったが、それでもなんとか制作シーズン

を了えた。

ところが震災2年目、作業を始めようとした処で左chが聴こえ辛い事にまた気付いた。昨年も聴こえ難いとは思っていたが、これ程では無かった。左右のイヤホンを取り換えたりと色々試しているうちに、ぢぶん自身の耳の変調にも気付いてしまった。左がハイ落ちしている。QY10の出力が小さい事はあるのだが、その小さい音になると、カナモノの音が聞き取れないのだ。

それが春以来の密かな悩みだった。QY10の蓋を開いて基板を見たりもしたが、見て判る様な故障もない。ライン出力もフォーンも同じバランスだから、オペアンプのチップの問題なのだろう。やはりこれは18年来の消耗と言うしかない。実にこれで200曲も作って来たのだ。

さて、そこで今後はどーすべきか、色々悩んだ。買い置いてあるQY700に移行すべきか、それとも新曲制作までもPCベースにすべきか。700は剩りに大きく、これまでの様に机(こたつ)の上では使えない。PCベースのMIDI制作は数年来試して来て、手順も慣れてはいるのだが、やはり打ち込みに時間が掛ってしまう。何よりドラムセットのハイハットワークのヴァリエーションが足りない。

やはりQY10をもう一台入手すべきか。音の問題ばかりかQY10は、実は老眼の目にとって1行液晶画面も鬼門になっていた。それでもまた同じ物を使うか。それならQY8か20か、22か……。悩んでいても答は見つからない。Yahooの出物に手を出してみた。2k円なのだ、オトナ買いだ。

届いた商品は「元函付」で、これによって発売当初のパッケージを初めて見る事が出来た。VHSのケースそのもののケースをやっと入手した。かつて用賀のリサイクルショップで最初にこれを見た時、確かVHSのケースの中に飾られていたのだ。しかし当時はその洒落たパッケージを知らず、本体と冊子だけを受け取って来てしまったのだ。

さてこの落札商品には、酷い液漏れの跡があった。この程度上等ちゃん、がジャンクの掟。構わず分解した。このバージョンは、函体の裏側全体にフルサイズの銅版を敷いてあった。それが液漏れの為に見事に緑青を吹いてて、アブストラクトの絵の様だ。ノイズ対策なのだろ。自家のものには全く無いので、外しても構わないだろーが。

これから基板を頂いて当家のものへ換装した。一応まだ内蔵電池は生きてい
るらしい。データのメモリ状態については、もう数カ月様子を見るところ。元の音
量に戻ったので、指し中っての悩みは解消されたと思う。問題無ければこれでま
た20年活かすか。

ウェブで分解情報を探していたら、QY10のハイハットを誉めている人がいた。
同じ耳を持っておいでだ。ゴム鍵盤の接点は消しゴムで汚れを落とせとある。そ
の通りにしてみた。ついでにユーティリティソフトを探してみた。QY10はかなりの
ヒット商品なので、データ保存のソフトならばあるのではないかと。そーして見
つけたのはKorgのユーティリティだった。バルク転送の送受信が出来るという。
御社の製品と同じ名前のフリーソフトを発表したりして、ご迷惑お掛けしてま
すのに、すいません。これで「日曜音楽」のRS-MIDIケーブルで繋げばどーに
かなるか。

いまやウォークマンは廃盤商品となり、ANDOの安物だけが残っている。そん
な中でポータブルカセットプレーヤー型の新商品が出た。USB接続でPCに音
を渡せるのが新しい。当初は5000円代だった。そのうち、と思っているうちに
なんとバルクが秋葉原に出回る様になった。

するとどーした事か、最初のIONとゆーメーカー以外からも続々、パッケージ
商品が出て来た。既に5~6社になっている。新聞の通販欄にさえあるぞ。そん
な訳で値崩れしたパッケージ商品をひとつ、買っておいた。

カセットの出し入れをする裏蓋が横に開く。おそらくはアナログカメラを意識し
たデザインなのだろうな。蓋を開いたままで何等問題なく動く。その方がテープ
残量を目視できる。

しかしこれはかなり部止まりの悪い製品らしい。初期不良の報告は山程ある。
その中でしっかりと報告されているのはスペックの嘘。ヘッドホン端子はステレオ
なのだが、なんとUSB出力はモノラルなのだという。そんな製品をこんなに沢山
の会社が群がってOEMしてて大丈夫なのか。(てなこと、藤本健氏のブログに書い
たら、ご本人から「試したらステレオでした」とお返事。バージョンによって違うのか)

本製品はUSBのバスパワーで駆動出来る。しかしPCからのUSBの電圧の方
が変動があるらしく、ワウフラッターが出るという。そんな場合には電池を併用し

た方が良いらしい。

一番良い使用法は、USBはAC電源アダプタでパワーディストリビューターとし、ヘッドホン端子からオーディオインターフェイスを用いてPCに録音する事だという。それじゃ何の利便性もない。何の事やら。

電池式のカセットプレーヤーがひとつ手に入ったと思えば良いのか。

あとがき

という訳で、またトラック画面やフェーダー画面のあるソフトをいぢっている。見知らぬソフトを手にして、あれこれと機能を探るのはこれまた実に楽しい時間なのだ。

それにしても、夕方の天気予報で表示される紫外線情報が、気になる。横に伸びるセルに陰影が付けてあって何だかマルチトラックみたいだ。それより首相官邸のデザインがMTRばいぞ。これは何かのMTRのデザインに使ってみたいものだ、などと言ってるうちに本当にMTRを自作してしまった。

どーもトラックがあると
書肆参月堂；編集発行
2018年9月17日重版